

父と昔

My 全人倶楽部 TONERI

25 2019年 1月1日号

発行 編集 敬文舎

〒160-0023

東京都新宿区西新宿3丁目3-23

ファミリー西新宿 405

TEL: 03-6302-0699

FAX: 03-6302-0698

E-mail: keibun-sha@aria.ocn.ne.jp

歴史を知る楽しさ、そして歴史が 教えてくれる意義を広めていきたい

雨の宮 風の宮

小島ゆかり

「雨の宮風の宮」という言葉をご存知だろうか。伊勢神宮の百二十末社のうち、雨の神・風の神を祀った宮である。転じて、上方詣では、ここは雨の宮。ここは風の宮と案内されてそのたびに賽銭があることから、出費がかさむに喩えともなった。出費がかさむのはよろしくないが、なんと風流な喩えか。

おみくじの大吉中吉見せ合へる娘
らは雨の宮風の宮

かつてこんな歌を作った。雑誌に一年間、毎月三十首の連載をするにあたり、前から興味があった雨の言葉・雨の諺を詠み込むことにしたのだ。調べてみると、じつに多くの雨の言葉があり、季節の味わい、風土の味わいなど、ゆたかなることこの上もなし。

ものの芽をつつみてけむる山蒸む
うんと春の闇がふくらむ

「山蒸」は、木々の芽吹きをうながす早春の雨。この漢字を見るだけでも、春の山全体がふくらんできそう。鳥根・岡山の言葉。

沖繩にイジユの花しろく咲くころ
カイジュの花洗ひの雨ふるころか

「イジユの花洗いの雨」は、沖繩で梅雨を言う言葉。ゆつたりとして美しい。むらむらとおきむらだちの心配して祖母のいはいば胡瓜食べたし

「おきむらだち」は、東から来る夕立のこと。故郷・愛知の言葉。野性味あふれるひびきが、祖母の畑の胡瓜を思い出させる。

いにしへの雨禁獄のあめの裔跳ね
とびあそぶ御苑の草に

「雨禁獄」にはすごい故事がある。白河院が金泥一切経供養の際、ひどい雨で三度も延期になり、供養の当日も雨になったことに立腹して、降る雨を器に入れて獄舎に閉じ込めたという。悪い冗談のような話だけれど、あながち作り話とも思われないところが怖い。

地下鉄にめつむり想ふみんなの
秋のはじめの鷹わたりの雨

「鷹わたりの雨」は、九月末ごろに何日も降り続く雨。ちょうど鷹の渡りがはじまるころ。南国・宮崎らしい大らかな言葉。

吾亦紅はくちびるを噛む赤さなり
たたずむたびに降るちらさあめ

「ちらさあめ」は、体に感じないほどの霧雨。霧雨に濡れた葡萄のイメージを呼び起こす長野の言葉。

こんな日は子として家に帰りたい
大根摺の日暮れとなりぬ

「大根摺」は、糞を言う島根の言葉。大根おろしが食べたくなる。

各地域でもすでに知らない人が多い言葉もあり、せめて歌のなかにしまっておいた。

死は一度 梅には梅のはなが咲き
雨の降る日は天気が悪い

「雨の降る日は天気が悪い」は、あたりまえのことを言う諺。わたしのものとも愛する雨の諺。雨の言葉に遊ぶうち、思春期だった「雨の宮風の宮」の娘の一人はもう母になり、わたしは祖母になった。



●小島ゆかり (こじまゆかり) / 歌人

「介護者のまなび」

グループホームにおける介護サービスとは

介護者と利用者との

視点の差を問う

笠井衛一

大きな転機をもたらした。以前は措置として利用者の入居などはすべて役所が決定し、そのため各事業所も競争意識もなく、利用者がお客であるという視点も皆無の時代が続いてきた。

しかし介護保険は契約を前提に成立したため、利用者は事業所を自由に選べる対等の関係となり、また介護形態も従前の母性愛に頼った一方的な押し付け介護から、科学性と客観性が重視されるマネージメントを核とした計画的な介護に切りかわった。

GHにもいままでの介護にはなかった初めての特色が盛り込まれた。ひとつは認知症に特化した介護形態である。九人を一単位とした少人数での介護、それぞれ個室に住み、食事や入浴

の世話を受けながら本人本位で穏やかな生活を続けようという試みは、新鮮で可能性に満ちた介護を予感させた。そして介護サービスの質を問う外部評価の義務付けも実施されていた。

外部評価は、介護保険施行後に義務化され、事業所は自己評価を行い、それに基づいて依頼された評価機関が事業所に赴き、聞き取りや関係書類を精査し、評価をする。

評価項目は事業所の理念から始まり、

地域・利用者・家族の意見・拘束と医療・終末期のケア・介護の計画性、食事や入浴や外出支援など六〇項目に及んでおり、まさに事業所が行なう介護サービスの全般に至っている。

毎日の暮らしの場として

では、介護はサービスである視点から、GHのサービスを検証してみたい。

まず、玄関の呼び鈴を押しドアを開けてみよう。ドアは開くのか施錠されているのかが第一のポイント。全ての施錠が悪いわけではない。立地状況や利用者の状態など、百の事情と千の理由があるから鍵をする。

だが、多くの一般家庭でもいつも鍵はかけるがGHの言い分だが、誰かが入ってこないかを警戒するのと、GHの利用者が出ていけないようにロックするのと違う、こんな言い訳がとても悲しい。

鍵がダメならセンサーはいかがだろう。ドアの開閉のつど、ピンポイントのお知らせだが、あの音をいつも聞かれる利用者さんの心情はいかに、と

思う。
仕事上で聞く警戒音と生活の中で響く不快音とを同列で語るのは、介護者



館内
間取図

に都合のいい介護目線と呼びたい。

玄関には介護のエッセンスがほかにも潜んでおり、そのひとつ、スリッパ(上履き)に注目したい。私は上履きやスリッパを使わないGHに出会うとうれしくなる。スリッパを勧められるGHの多くは介護員も上履き(ナースシューズなどの作業靴)を使用している。その上履きは台所からトイレ、廊下を歩み、脱ぐ事もなく利用者の自室まで

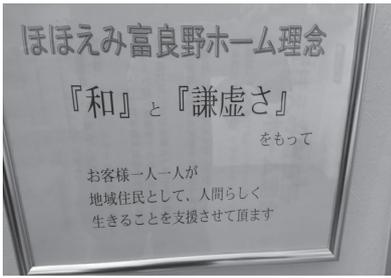
グループホーム(間取り例図)
個室(ひとり一室)を基本にして、5~9人が、原則利用。食堂・浴室・洗面所ほかの共同設備を有する。



グループホーム光景

侵入することとなる。まさに土足のままで利用者の自宅を闊歩するのだ。土足の介護者から「本人本位の介護」と聞かされてもなんの説得力もないように思えてしまう。水や小石、汚れなどは裸足でしか補足できない場合もあるし、アメリカでもないのに室内を土足で歩くのは、GHという在宅介護に似合わない。

GHのトイレは居間の近くに設置されていることが多い。それはすぐに連れていける介護の動線が考慮された結果だが、当然にトイレのドアは居間に向って開かれる。車いすの利用者は車いすの出し入れのため、便器に座ったまま二度も戸が開けられる。介護者だったらお尻を出した状態で、戸が開けられることに耐えられるだろうか。嫌なら利用者も同じと考えるべきで、カーテンでも用意できたと思うのだが、なかには認知症だから大丈夫と思う介護員もいて、そんな職員は介護する資



北海道富良野市の「ほほえみ富良野ホーム」に示されているホームの理念。



介護の手

格はない、いかがだろうか。

居間と兼用が多い食堂での出来事も興味深い。まずは食器を見てみよう。

全員が同じ器を使っているGHも多いが、合宿や社員寮でもあるまいし、食べられるなら器は何でもいいわけでは無い。個人が愛用持参した茶碗や湯呑でも時折、名前が貼られた場合も散見される。まさに間違えないようという介護者目線での発想だろう。

自宅ではどうかを考えればよくわかる。あるGHでは器にうどんを少量入れ、利用者に提供していた。食べ終えそうになると介護員は同量のうどんを器に足し、いつでも温かく伸びていないうどんとなるよう努めている。食べやすさと徹底した見守りの介護。どんぶりいっぱいのもうどんと格闘し、のびきって倍に膨れたうどんに疲れ切った食べるのを放棄したお年寄りを何人も見てきた私にとって、小分けと見守りの食事風景を見たとき、介護の基本に出会えた気がした。

入浴の手順でもそのGHの介護内容が

よくわかる。あるGHでは、多くのGHがしているような入浴日を週に月・木のように決めず、毎日お湯を入れて用意し、まさに毎日が入浴日として入浴支援を行っているのだ。手間や効率から計れば、入浴日を曜日で決めたほうが楽となるが、介護側の都合を排した取り組みに敬意を表したい。車椅子でいえば、車椅子は移動の手段、移動するための車椅子をそれ以外の目的で使えない。つまり、車椅子のまま食事や目的に利用しない介護を基準としている姿勢がうれしい。

介護する側の課題

介護の取り組み、サービスについて内容から指摘してきたが、介護の世界ではサービスに対する自覚が乏しく、してやっている介護がまだまだ横行している。

自己評価や外部評価といった自己検証が不足であれば、利用者や家族からの意見・要望にも疎遠となってくる。サービスを商売としながら内部での検証やアンケート等による外部への働きかけにも無関心な業界は、この世の中で介護ぐらいかも知れない。

利用者家族も預けている以上、人質に取られた感や手を放した後ろめたさも手伝って、思うように苦情もいえず、やってやる介護に甘んじているのが現状だ。ちよつとでも口を挟めば、うる

さい家族とレツテルが貼られ、うちが嫌なら引き取るかい？ と見えない圧力が迫ってくる。

介護計画もわかりで、通常であれば長期目標は、安全で安心な生活をめざすとし、短期目標は、入浴で清潔さを保つ、となるのが一般的なプランだが、私が知るGHでは安全で安心は家族の願いで、本人は楽しく暮らしたい、であり、入浴は生活の目標ではなく手段でしかない。ゆえに長期目標は「笑って暮らす」となり、短期は「笑顔になる」とする明快なスタンスが基調である。

最後にGH側の事情も説明するなら、激務のわりには低賃金、慢性的な人手不足、利用者からの暴力とセクハラ、うるさい家族などの難題が取り巻くなかで、介護員のお年寄りが好きという善意で維持されている多くのグループホームの現状も事実として明記しておきたい。



NPO 法人福祉サービス評価機関 K ネット理事である筆者(右)、グループホームで暮らす 102 歳の母(中央)と長女(左)。

長野県御代田町 浅間縄文ミュージアム 活火山浅間山と花開く もうひとつの縄文文化

縄文王国信州

近年は世界遺産候補の北海道・北東北の「縄文」に押され気味だが、信州といえは「縄文王国」の名を冠しても、決して恥じ入ることはないだろう。

コンピュータ・シミュレーションによれば、五〇〇〇年前の中期縄文時代、二六万人の人々を有した日本列島において、信州が人口は断然トップ、国宝「縄文のビーナス」に代表される豊かな精神文化が花開いた縄文文化熟成の地である。

……ここまで書いてきたが、それは八ヶ岳山麓の縄文世界の話、活火山浅間山のもとに栄えた縄文文化は、つい三十年ほど前まではほとんど知られていなかった。

本格的な発掘調査のメスが入ったの

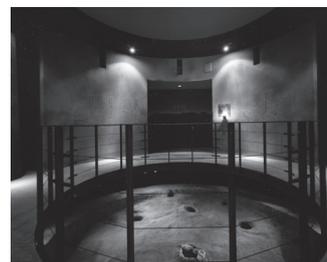
は、一九九〇年、御代田町川原田遺跡においてで、ここからはドーナツ状のリングや曲線で装飾された「焼町土器」と呼ばれるユニークな土器が発見された。

この調査を嚆矢に、数多くの縄文遺跡が発掘され、しだいに信州における「もうひとつの縄文文化」像が明らかになっていった。

浅間火山と焼町土器文化

浅間山麓の縄文文化を人口に膾炙するため、二〇〇三年浅間縄文ミュージアムがオープンした。

ミステリアスな縄文世界を堪能いただけるようディスプレイにも工夫を凝らし、壁面ケースに土器ズラリといった従来型の展示を廃して、個別の遺物群にスポットをあて、物語性のある



川原田遺跡の竪穴式住居 (模型)
5000年前

展示を実現した。

展示のメインは、国重要文化財となっている縄文中期の焼町土器群である。これ以外に、縄文の暮らし、ファッション、精神世界などを配した。

また二階には館から九キロの位置に噴火口をもつ浅間山の展示があつて、活火山とそれを取り巻く自然環境を理解することができる。

ひと昔前は貧しい時代の見本として描かれた縄文時代だが、今や形勢有利、エコでユートピアの代表格として語られるようになった。それも、何だかな〜ではある。

いずれにせよ五〇〇〇年前の縄文世界の姿を見て感じていただくため、発掘調査を継続しつつ、新しい発見を盛り込み、変化し続けるミュージアムでありたいと願っている。



足で歴史を感じる、
まち歩き of 極意

第十二回
明治の地図を片手に
麴町区・神田区の区境を歩く

平成御徒組 R

明治一五〇年を記念するさまざまなイベントが開かれた二〇一八年、五十一回目を迎えた地図展では「地図に映る明治の日本」と題し、激動の時代に作られた地図が多数展示された。会場を回ると、地図製作技術の進化とともに、江戸から東京へのまちの変遷を読み取ることができる。

日本の地図に影響を与えた普仏戦争

地図は安定した国家の経営に欠かせない。西南戦争で重要性を再認識した明治政府は、西洋の近代測量技術を取り入れ、地図の整備を進めていく。

旧幕府の軍制を引き継いだ明治初期の陸軍はフランスの制度を採用し、地図も色彩豊かなフランス様式で作成されていた。ところが、普仏戦争（一八七〇〜七二）でフランスが敗れた影響で軍制がドイツ式に移行すると、地図もフランス式から単色のドイツ式に変更される。世界史の大きな流れが、日本の地図製作に影響を与えていたのだ。

見えない区境を意識して歩く境界協会

地図展が開かれた千代田区役所から、境界協会のまち歩きに参加した。メディアにもよく取り上げられる境界協会は、都県や市区町村の境界をたどるフィールドワークを重ねている。現実には見えない境界を意識して歩くと、その土地の特徴、

ご推薦!

我が博物館

テーマが好評です

浅間縄文ミュージアム
館長
堤 隆



国重要文化財 焼町土器
川原田遺跡出土 5000年前

ここが見所、 地元密着型の

静嘉堂文庫美術館 館長
河野 元昭

を防がなければならないという強い信念をもつようになったのである。彌之助が没したあと、嗣子・小彌太がこれを引き継いだ。

静嘉堂は一八九二年（明治二五）岩崎彌之助により創設された。三菱財閥の創業者にして初代社長をつとめた岩崎彌太郎の弟にあたり、二代社長として三菱を発展させた実業家である。

彌之助は学問を好み、古い文化に尊敬の念を抱く人間であった。新たな近代国民国家の創出を目指した日本は、早急に西洋文明を採り入れる必要があったが、それは廃仏毀釈に見られるごとく、伝統的な東洋文明の否定や軽視を生んだ。そして多くの古文化財が海外へ流出しはじめる。これを目の当たりにした彌之助は、なんとこれもこれ



静嘉堂文庫美術館
(外観)

東京都世田谷区 静嘉堂文庫美術館

閑静な街にたたずむ、

日本・東洋の古美術の粋を集めた美術館

- ① 「平治物語絵巻」(信西巻) 平治の乱——信西入道の悲劇に取材する鎌倉時代合戦絵巻。東京国立博物館とボストン美術館に所蔵される二本と共に、合戦絵の最高峰を形成する。
- ② 「閨屋漆標 閨屏風」(俵屋宗達筆) 『源氏物語』の閨屋と漆標の帖に取材し、光源氏と昔の恋人との邂逅を、俵屋宗達が造形化する。劇的な構成のうちに、王朝美が蘇る。
- ③ 「龍虎図屏風」(橋本雅邦筆) 天下の耳目を集めた近代絵画の傑作。日本画の革新を進めた雅邦の表現意欲が画面を突き破る。
- ④ 「羅漢図」(牧谿筆) 宋末元初の禅



「平治物語絵巻」一段(部分)

- ⑤ 「風雨山水図」(伝馬遠筆) 日本の水墨画に大きな影響を与えた馬遠の構築性が遺憾なく発揮された力作。もちろん、工芸・刀剣・書跡・古典籍においても、名品傑作が目白押し。工芸からは「色絵吉野山図茶壺」(野々村仁清作)と、いま話題の「曜変天目」(稲葉天目)、ブームとなっている刀剣からは「手掻包水」、書跡からは「倭漢朗詠抄 太田切」と「中峰明本と与えた趙孟頫の手紙」、古典籍からは『李太白文集』をあげておこう。

二〇一九年一月二九日から、「桐村喜世美氏所蔵品受贈記念 岩崎家のお雛さまと御所人形」がはじまる。五世大木平蔵の傑作を堪能いただきました。ご来駕をお待ち申し上げます。

魅力が見えてくる。

大手町・丸の内・霞ヶ関など大名屋敷が並んだ麹町区と、武家社会を支える町人が集まった神田区は、一九四七年に合併して千代田区となった。旧区境を流れる日本橋川では六四年のオリンピックを前に首都高速の工事が急ピッチで進められ、江戸城石垣の遺構が高架に覆われた。下水が流れ込む川は悪臭を放ち、住民から背を向けられたが、環境への意識が高まるなか、内濠外濠の水質改善川に顔を向けたまちづくりが進められている。

二〇一八年三月に架けられた「竜閑さくら橋」を渡って麹町区から神田区に入る。北東に向きを変え、神田区と日本橋区の境界を流れていた竜閑川の跡を進む。竜閑川は元禄期に開削された掘割で、幕末期に埋め立てられたが明治中期に再び開削されて水運に利用された。戦後、瓦礫で埋め立てられ、暗渠となった。ビルの隙間を一直線に延びる暗渠を歩いていくと、昨年まであったガード下の飲食店街「今川小路」が姿を消していた。都内各所で再開発が進み、高層ビルが乱立するなか、商店街にはナシヨナルチェーンが増え、まちの景観がどこも似通ってきた。

まちは日々姿を変えるが、昔の地図を手に歩く土地の記憶が呼び覚まされる。過去の情景がイメージできれば、現在の先に連なるそれぞれの土地の未来を描くことができるだろう。

境界をたどるまち歩きは、歴史をふまえたまちづくりにつながる。



かつて区境だった日本橋川の頭上を走る首都高速。神田橋～江戸橋間の高架を撤去し地下化する計画が進められている。地下化で日本橋の青空が戻るというが、青空が必要なのは日本橋だけではない。

地域研究 レポート

応安七年円覚寺火災 と鎌倉山崎

川本慎自

応安七年（一二七四）十一月二十三日、僧侶と柴売りの口論がきっかけで起こった鎌倉円覚寺の火事は、全山を焼き尽くす大火災となった。このとき円覚寺住持の大法大闢は、円覚寺を逃れて山崎の宝積寺という寺に避難する。火災の責任を取って住持を辞めるという大法大闢を慰留するため、義堂周信が後を追って山崎へと駆けつけ、周信が『空華日用工夫略集』に記されているが、この避難のルートを中世の風景を推測しながら考えてみたい。

円覚寺から北西へ大船方向へ向かい、左に台町への道入ると時宗光照寺がある。ここは一遍が弘安五年（一二八二）に鎌倉入りを阻まれ、江ノ島に引き返した地と伝えられる。さらに西に



山崎切り通し

進むと台公会堂があるが、ここは旧地藏堂跡で、室町期の地藏菩薩坐像があった（現在は鎌倉国宝館に寄託）。この道が中世まで遡ることを推測させる。しばらく行くと、山崎小学校脇には切り通し跡がある。残念ながら片側は削平されてしまっているが、残された片面だけでも中世の面影を感じさせる。さらに進むと庚申塚や江ノ島への道標があり、近世のものではあるが、この道が古くより鎌倉から北郊へと抜けるメインルートであったことがうかがえる。そして、円覚寺から歩いて三十分ほどの道のりで、宝積寺跡へ到着する。義堂周信らの避難先、山崎宝積寺は現存しないが、湘南モノレールの富士見町駅と湘南町屋駅のほぼ中間に、斜面を方形に切り取った伽藍跡を確認できる。昭和五年、常盤山文庫で知られる実業家、菅原通済によって建設された「大船江の島自動車専用道路」が伽藍跡の中心を貫くこととなり、現在は頭上をモノレールが走っている。

その近傍には北野神社があり、境内には応永十二年（一四〇五）銘の宝篋印塔がある。『新編相模国風土記稿』によると、山崎宝積寺が廃される際、



山崎宝積寺跡

●かわもと・しんじ / 東京大学 史料編纂所 准教授

本尊であった十一面観音菩薩立像はこの北野神社へ移されたことされる。この像はその後さらに近隣の昌清院へと移り、現在は鎌倉国宝館に寄託されている（特別展「津久井光明寺」神奈川県立金沢文庫、二〇一五年）。

さて毎年七月中旬、北鎌倉では、八雲神社の例大祭が行われる。この祭礼では、山崎と山ノ内の両八雲社の神輿が北と南から出発して巡行し、光照寺のほど近く、天王屋敷で行き合って神事を行う『鎌倉ゆかりの芸能と儀礼』神奈川県立歴史博物館、二〇一八年）。

この北からの山崎の神輿の出発点となるのが北野神社であり、神輿の巡行路は、大法大闢・義堂周信の避難ルートとおおむね一致するものと考えられる。円覚寺のある山ノ内から見て、山崎は鎌倉の領域の北限ということになるのである。つまり山崎という地は、鎌倉から北郊、江ノ島方面への出口にあたる重要な場所だったのである。

大法大闢は山崎宝積寺で義堂周信に説得され、辞意を撤回して渋谷円覚寺へ戻る。しかし、本当は山崎から鎌倉を脱し、江ノ島の方へと逐電するつもりだったのかもしれない。

鉄道浪漫

高橋 治雄

第5話 猛吹雪

吹雪とは、強い風で舞い上がった地表の雪と降雪中の雪が一体となって視界を悪くする気象状態をいう。その吹雪を五能線で体験した。

吾輩は静かに降る雪の中を川部から東能代に向かった。広々とした雪原を快走する列車は鱈ヶ沢の手前で白波が騒ぐ日本海に躍り出る。高台から見下ろす海は灰色に近い色の高波が連なり、まさに荒れ狂う怒濤となって目の下いっばいに拡がっていた。雪は吹雪に変わっていた。

あまりの強風のため、途中で規制がかかって最徐行運転となる。列車は地平に降りて海辺をゆっくりと進む。波が目の高さで豪快に押し寄せていた。集落の脇の畑の中でふと気が付くと、強い風のために真横に流れる雪の中を白くて大きな、乗用車ほどもある雪の塊が次から次へと飛んでいく。初めて見る光景で、あつげにとられてしまった。

通常は走行中の車窓から降りしきる雪を見ても真横に流れていくだけであるが、最徐行のおかげで激しく飛んでいく雪のかたまりをはっきりと見てとれた。

列車はもとの速度になって、大戸瀬、風合瀬、轟木と進んでいく。あたりはまさに海の景観のハ

科野の里を歩いて

古代への時の旅

窪田憲子

十一月十六日(木)、古墳ツアー「森

將軍塚古墳」「長野県立歴史館」「浅間縄文ミュージアム」へいざ出発！関越自動車道では、秋晴れの日差しはなつかしく、富士山がきれいに見え、紅葉の始まった山々を楽しみながら気持ちの良いドライブになりました。

まずは戸倉で蕎麦料理処「萱」の名物蕎麦を堪能し、歴史ある萱葺の家屋や調度・酒蔵を見学し江戸時代の面影を偲びました。

現代人は、何ごとも東京優位で判断をすることが多いが、歴史を見れば地方の独創的な歴史的発展にいつもながら驚かされている。

史跡「森將軍塚古墳」に登る

遠く北アルプスまでみえる素晴らしい景色を見たときに、私の心はタイム



全 森將軍塚古墳並んだ埴輪の景と眺望

スリッパしました。古墳を造っている時代、作業に従事していた若くて美しい女性(私?)…どういう気持ちだろう? 辛かった? 楽しんでいた? 幸せだった? 精一杯生きたであろうか? 石を運び歩いて登ったの? 等々。歴史的な考察を完全に無視して夢の世界に遊んでみました。

代々この地で暮らしていた少女、生きていくために必要な事柄を両親や集落の人に教わり、懸命に生きていた。

この地を治めていた王は民のより豊かな生活を求めて一生懸命活動し、民は王の指導力を信頼し、集落の結束は強かった、日本がヤマトを中心にまとまり始めていた激動のこの時代に、王の反応は早かった。

千曲川の水運・黒曜石の流通など世の中の情勢を素早くつかみ、ヤマトとのパイプを太くしていこうとした。ヤマトが持つ、最先端の技術の導入を試み、技術と人材の受け入れを積極的に行った。治水は重要な政治課題でもありました。

古代の人々の息吹き

ヤマトからの派遣者は多くの技術集団をとめない、その長は王の娘と結ばれ、この地に根を下ろしていった。少女はヤマトからきた若い技術者に恋をして幸せな家庭を作った。高齢なられた王のため、又、あれヤマトとの絆の証に、学んだ技術を存分に使ってこ

発掘の結果に基づき、正確に復原した古墳を見学する参加者と筆者



の地が見渡せる山の上に壮大な前方後円墳を作ることになった。

少女は母となり、両親や夫や子供たちと一緒に工事に参加したのであろうか。

民は老若男女を問わず、偉大な王のため、後継者のため、時代の流れを肌で感じながら工事に従事した。楽ではなく、苦しいことであつたには違いない。でも集落の民は、自分の役割をしっかり認識して責任を持って参加していたと思いたい。老人や女性と子供は自分が持てる範囲の石を持ち、ときには花を見、景色を見、生活の知識を伝承しながら、この山道を歩いていた。

紅葉の山道を、みんなで歌いながら楽しんで登っている姿が見えてきた! 感傷的になってしまいました。権力者以外の集落の民にも、ささやかながらも幸せのパズルをはめてあげなければいけない。「一生懸命生きることが幸せなんだ」と。

見渡している景色は変わらないけれど、若かった少女は年老いました。

●くぼた のりこ
舎人倶楽部・会員

イラストで、浜辺や様々な形の岩が織りなす豪快な磯がどこまでも続く。雪はときおり小降りになるがすぐにまたもとの激しさに戻っていた。



五能線は秋田県の東能代と青森県の川部を結ぶ人気観光路線で、世界遺産の白神山や延々八〇キロメートルに亘る日本海の変化に富む雄大な景観が楽しめる。津軽平野を行く五所川原付近からは、津軽富士と言われる秀麗な岩木山や一面に広がるリング畑が旅情を誘う。山が迫る崖下で海がすぐそばを通るため昭和四十七年十二月には路盤が高波に流されて蒸気機関車が脱線転覆するといったましい事故が起きてしまった。

歴史的には、木材の運搬が盛んであつた米代川の水運と、街外れにあつた現在の東能代(官設鉄道の駅)を結ぶ貨物支線として明治四一年に開業したのが始まりで、旅客輸送もすぐに始まった。その後日本海に沿って順次路線を延ばして行く。

一方、反対側では川部と五所川原を結ぶ陸奥鉄道が大正七年に開業しており、その先を国が建設していく。昭和二年に陸奥鉄道を編入し、昭和十一年に最後の区間を完成させて全通した。五能線の名称は、かつての終点で陸奥鉄道と接続する五所川原の五と能代の能をとって付けられた。

仕入れた古雑誌『面白半分』をバラバラ捲りながら、このころの雑誌にはみんない個性的な顔があった。それに比べると近ごろは、マーケティング第一。スポンサーの顔色ばかり。なんてブツブツ呟いていると、突然、「このページは印刷ミスではありません」の一文のみ、ほかはなににもない白紙ページが現れました。

一ページ戻ってみると「タモリ氏の『ハナモケラ語の思想』の原稿は、まだ印刷所に到着いたしません。白紙のままでお届けすることを深くお詫び申しあげます。編集部」と、載っていました。

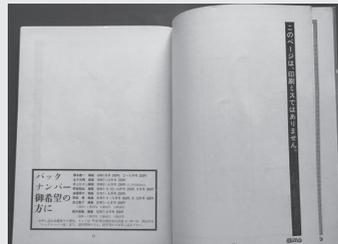
噂には聞いていましたが、連載中のタモリの原稿がメ切に間に合わない

私たちの活動を紹介します

長久手市郷土史研究会の歴史と活動

「郷土の歴史を調査研究し、もって郷土文化の振興・発展に資することを目的」（規約）に昭和五八年、長久手町郷土史研究会として発足し、市制施行に伴い、「長久手市郷土史研究会」と改称し、全会員六〇名余で活動を推進しています。

連載 路地裏の「めっけ本」拾参



伝説の白紙ページを発見！
このページは、印刷ミスではありません」の一文。

● 榎川 渉 かじかわ・わたる / 路地裏誠志堂主人。Web専用古本屋「路地裏 誠志堂」
<http://rojiura-s.o.oo7.jp>
(詳しくはホームページをご覧ください。)

かった、伝説の白紙のページを、ついにめっけちゃいました。

● 『面白半分』1977年9月号
俗に言う「穴が空く」と言う奴です。でも、なんと、白紙のまま載せてしまうとは、大胆な！

当時の編集長（半年毎の交代制）が筒井康隆なので、事故も面白がり企画にしてみましたようです。

「編集長筒井康隆は、この事故と想定して、タモリに連載を発注していた。」なんて説も、ネット上に転がっていました。さもありません。

夢枕漢は「これ以上突き抜ける所のない実験小説」と称賛していたようです。（ネット上の「タモリ年表」）大胆が許された時代だったんですね。それに比べるとブツブツ

そのため、会員自身の力量を高める

活動として、市の公用バスで市内の史跡調査を行ったり、全体学習会を時には市民も参加できるように市広報などで呼びかけて行ったりしています。更に、

県外の史跡調査（今年度は、春・関ヶ原古戦場、秋・東濃の史跡）も行っています。いずれの活動にも三〇名から五〇名程度の会員が参加しています。

その上で、活動の成果を、春の市文化協会文化芸術展や秋の市民まつりに市役所西庁舎で発表しています。今年度は、春は「長久手の寺院①」、秋は「長久手の寺院②」を各八つ切り画紙四十

枚程にまとめ展示しました。

一方、長久手古戦場などの史跡見学者へは、市生涯学習課を通して、例年三〇件ほどの団体の史跡ガイドを行っています。

このような会や個人の研究活動の成果を会報『胡牀石』(年二回、A四版・二〇頁前後)にまとめ、現在五三号の編集を進めています。

● 事務局 長久手市役所生涯学習課内 〒480-1196 長久手市岩作城内の6011 ● 連絡先 長久手市氏神前515 会長 荒木英夫 電話 090・1270・7102

日本歴史文化講座(ヒスカル)のご案内

戦国時代～全10回の内容～

戦国大名が、群雄割拠した動乱の時代。応仁の乱にはじまり、輩出された人傑の興亡を中心に、この時代をより深く学んでいきます。

第1回 3月22日(金) 織田信長と正親町天皇	金子拓(東京大学准教授)
第2回 3月29日(金) 斎藤道三と斎藤義龍	木下聡(東京大学助教)
第3回 4月12日(金) 織田信長と足利義昭	水野嶺(東京大学地震研究所)
第4回 4月25日(木) 徳川家康と武田信玄	柴裕之(東洋大学非常勤講師)
第5回 5月17日(金) 築彦周良と大内義隆	須田牧子(東京大学助教)
第6回 5月24日(金) 島津義久と島津義弘	畑山周平(東京大学助教)
第7回 5月31日(金) 伊達政宗と上杉景勝	黒嶋敏(東京大学准教授)
第8回 6月14日(金) 豊臣秀吉と豊臣秀次	矢部健太郎(國學院大学教授)
第9回 6月21日(金) 徳川家康と豊臣秀頼	林晃弘(東京大学助教)
第10回 6月28日(金) 織田信長と明智光秀	金子拓(東京大学准教授)

● 時間: 15:00 ~ 17:00

● 会場: 文化産業信用組合 / 千代田区神田神保町1-101 ☎ 03・3292・2711

● 定員: 50名

(問い合わせ・申し込み: 敬文舎03・6302・0699)

● 資料代: 2,000円(舎人倶楽部会員は1,800円)

あなたも
入会
しませんか

My 舎人 TONERI 倶楽部

好評
始動中!

歴史好きの方、あるいはこれから歴史を学ぼうとする方々とともに、歴史を知る楽しみを目的として集い語り行動する倶楽部です。現在、講演・講座の開催などで研究者との交流も行ってあります。

当倶楽部は、随時入会可能です。奮ってご参加ください。

■ 入会特典

- 講座・講演会の割引優待や無料受講券の進呈。
捺印5個で受講が1回無料になるスタンプカードの発行。
- 会報『My 舎人倶楽部』を年4回送付。

■ 年会費

一般会員 3,000円 / 賛助会員 30,000円

特別賛助会員 100,000円

(会費のお支払い方法は、お申し込み時にお知らせいたします)

■ お申し込み方法

お名前、ご住所、電話番号、メールアドレスを明記の上、敬文舎または舎人倶楽部までEメール (toneri.k@blue.ocn.ne.jp) にてお申し込みください。

舎人倶楽部会報、講座、などについて、ご意見・ご感想などをお寄せください。

敬文舎ホームページ <http://k-bun.co.jp>

